

慈濟

ものがたり

ミャンマーで大地震

封鎖されたマンダレーへ届けた支援





撮影・鄭洵宏 台北市・中正紀念堂の灌仏会

美善の人間浄土^{じんかん}

● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・済運

すべての人の心に愛があり、
絶えず感謝の気持ちを持ち、
宗教の垣根を超えて、
敬虔な心でお互いに祝福し合いましょう。

三業が純粹無垢で、心を一つに善の道を歩めば、
福と慧は円満に成長し、

この世は美しく正しい浄土となるでしょう。



慈済ボランティアは、ミャンマー・マンダレーの地震被災地緊急援助のため、建物の損壊が最も深刻な古都インワを視察した。そのうちの一つ、マハシュエターロン・パゴダでは涅槃仏の頭部が崩れ落ちた。顔面が下に向いて、まぶたが垂れた姿は、あたかも衆生を憐れんでいるかのようなのである。



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】

一歩一歩は大変でも価値がある

善耕／訳

4

【今月の特集】

ミャンマーで大地震

封鎖されたマンダレーへ届けた支援

高雄外国語チーム
日本語組／訳

8

【特集】

一瞬の思い五十銭の善意

慈済はもうすぐ **60** 年

惟明／訳

42

【グローバル慈善】

日本・岩手県大船渡市

津波と山林火災の後

御山凜／訳

48

【證嚴法師のお諭し】

菩薩の愛は限りなく

慈願／訳

60

【親と子と教師、三者の本音】

理想と現実の間で

惟明／訳

66

【命の贈り物】

張お婆さんの障害物競走

何慧純／訳

71

【人物誌・マレーシア】

四十六歳からの私の捨て得

御山凜／訳

76

【行脚の軌跡】

伝播という力

済運／訳

100

慈済の出来事

5/16
6/21

済運／訳

106

一歩一歩は大変でも価値がある

過去数カ月間の月刊誌『慈濟』が報じた時事問題を振り返ると、いつも天災と人災による喜びと悲しみや出会いと別れが織り交ざっているのがわかる。二月号には、トルコのマンナハイ国際学校の成り立ちと様子が紹介された。昨年末に来台したシリア人教師たちは、来る途中で十三年に及ぶ内戦が終結し、自分たちはもはや難民ではないことを知ったのだった。三月号と四月号では、毎年のように住宅に迫るロサンゼルス山火事について取り上げているが、今年の災害の規模は想像をはるかに超えるものだった。三月号の表紙を飾ったのは、旧正月を前に発生した台湾嘉義県大埔郷の地震被害の様子だ。慈濟は、今でも台南の被災地で恒久住宅を建設する計画に取り組んでいる。

月刊誌『慈濟』五月号の報道内容を確認すると、世の中が未だ混乱していることのために息が出る。三月二十八日、強い地震がミャンマー中部を襲い、華人の間では「瓦城」という名で知られているマンダレーとその周辺地域では、三千人以上が亡くなった。マレーシア、台湾、インドネシア、中国の慈濟ボランティアは、あらゆる手段を尽くして現地に支援物資を届けようとしていたが、国際メディアはアメリカの関税政策による経済的影響に焦点をあてていた。

ミャンマーの軍事政権は四月二日、災害救助を進めるため、四月二十二日まで内戦の一時停止を発表した。すでに被災地に入っていたヤンゴンの慈濟ボランティアたちは、停戦を機に積極的に病院や寺院、孤児院、避難所を慰問し、キャンバス生地や福慧ベッド、飲料水、食料などの物資を寄贈した。

また、「仕事を与えて支援に代える」方式で村民たちに、被害を受けた寺院や村落に仮設住宅を建てる手伝いを要請した。このほか、国際援助機構や現地の華人団体と意見交換を行い、中長期的支援に向けたさらなる情報を収集した。

直近十年間の世界寄付指数（WGI）の統計によれば、ミャンマーは長い間連続して第一位にランクされており、最も慈善活動に熱心な国と称するに相応しい。一方で、直近の四年間は、内戦や政情不安、物価高騰の中でボランティアは慈善貧困救済を進めてきた。

慈済の世界における慈善活動は、これまで百三十六の国と地域に及んでおり、六十八の国と地域には支部または連絡所を設立している。少しずつゼロから歩み始めて困難な過程を経た甲斐があったと言える。ミャンマーを例に挙げると、二〇〇八年、十万人の犠牲者が出たサイクロン・ナルギスの際は、

マレーシアなど各国の慈済ボランティアがあらゆる困難を乗り越え、初めてミャンマーでの被災地緊急援助を行った。その後、彼らが被害を受けた農民を助けるために種籾を配付すると、現地ボランティアになる人が次から次へと現れ、「米貯金」で人助けするという善行を促すようになった。そして、今年マンダレーで大地震が発生すると、彼らは直ちに被災地に駆けつけた。

毎年旧暦三月二十四日は、慈済の創設記念日である。今年の四月二十一日より、慈済は創設六十年目に入った。その日、インドとマレーシア、シンガポール、台湾のボランティアは、インドのラージャグリハにある霊鷲山の頂上で、仏陀が『法華経』を講釈した香堂跡と、静思精舎のボランティア朝の会とをオンラインで結び、梵唄で『無量義経』を敬虔に唱和した。その後、静思精舎と各国の連絡所でも朝山礼拝が行われ、皆は心を合わせ、世界の紛争終結と平穏無事を祈った。（慈済月刊七〇二期より）



今月の
特集

ミャンマーで大地震 封鎖されたマンダレーへ届けた支援

写真編集・黄筱哲（月刊誌『慈濟』撮影者）

美しく精緻なパゴダ（仏塔）芸術の至宝と、異なる陣営の武力衝突が併存する現在のミャンマー。
この美と哀しみの間で生きる人々に、マンダレー大地震は、さらなる苦難をもたらした……。

マンダレー市近郊の古都インワは、ミャンマー仏教史において、経典が集結し、仏教芸術が花開いた重要な拠点であった。そのインワにあるマハシュエターロン・パゴダも地震で損壊した。（撮影・怡夢丹）

深刻な被害

ザガイン断層の一部で発生した大地震。一八三九年以来、およそ二百年にわたり沈黙を保っていた断層が、一気にエネルギーを放出した。その規模は甚大で、マンダレー市内では多くの建物が倒壊した。

マンダレー市にあるマソエイン僧院は、古くから僧侶育成の中心地であり、国内外の仏教学者が集う学び舎でもあった（右の写真）。地震発生時、僧院内では大勢の若い僧侶たちが、上座部仏教の学問体系におけるダンマチャリヤ学位の僧侶試験を受けている最中だったので、建物の損壊により、多くの死傷者が出た。

（右・金夢玲撮影。左・郭威陽撮影）



信仰

マンドレーは、ミャンマー近代仏教史における中心地の一つであり、寺院やパゴダ（仏塔）の建築は芸術の現れである。市内に足を踏み入れると、まるで仏教博物館にきたかのような錯覚を受ける。

古都インワには、ミャンマーの歴史において、多くの王朝が都を構えてきた場所だが、九百余りにのぼる歴史的建造物、パゴダ、寺院が損壊し、その数は全体の九割近くに達する。（右：郭威陽撮影。左：怡夢丹撮影）



痛みと悲しみ

災害直後は重機がなく、人々は倒壊した建物の下敷きになった負傷者を素手で掘り出すしかなかった。救出できたとしても、医療資源の不足により、多くの死傷者が出た。

マンガレー中央病院の主要棟も被災し、危険な状態となった。病院側は、周囲の空き地にテントを設置して仮設病棟とした（左の写真）。日中の気温は四十度にも達し、医療体制も限界を大きく超えていた。支援団体はテントを持ち込み、臨時避難所を設置して医療サービスを提供した。（撮影・怡夢丹）



一一月二十八日、ミャンマー時間の
一二十二時五十分。車に乗っていた姜

栄華（ジャン・ロンフワ）さんは、波に
打たれたかのように車体が揺れるのを感じた。彼はすぐに気づいた——地震だ。

道行くバイクは次々に停車し、家々からはパニックに陥った人々が飛び出してきた。揺れは一分近く続いたように感じられ、以前のものよりも長かった。揺れが収まると、彼は車を降り、泣いている人を慰めた。「大丈夫ですよ。逃げ出してきたんだから。ここは安全です」。

この時、マンダレー地方にいた姜さんは、まだ被害の深刻さに完全には気づいていなかった。同日のアメリカ地質調査所（USGS）の観測によれば、モーメントスケールで七・七と計測され、震源の深さわずか十キロという極浅発地震であり、破壊力はきわめて大きかった。後に犠牲者が数千人にのぼることも判明したこの地震は、マンダレー大地震と命名された。

地震当日、李金蘭（リー・ジンラン）さんは折しも台湾人の夫と共に台湾へ帰

省していた。李さんは慈済ミャンマー連絡所の責任者であり、彼女も、母方の叔父の姜栄華さんも、ミャンマーで生まれ育った華人である。地震を知った李さんは、急いで家族や友人に連絡して安否を確認すると同時に、緊急支援物資の購入と配付を手配した。

姜さんが車で帰宅する途中、目にしたのは倒壊した多くの建物だった。自宅にたどり着くと、至る所に物が散乱していたが、幸いなことに家族も建物も無事であった。彼らは散らかった物を片付け、その晩は屋外で寝泊まりすることにし、準備を整えた。何しろ、余震が絶え間な

く続いていたのだ。誰も家の中で眠る勇氣はなかった。夕方、姜さんはスマートフォンを手に、市内から少し離れた場所に向かい、インターネットへの接続を試み、そして、ようやく李さんからの電話を受け取ることができた。

李さんは姜さんに、購入した物資を受け取って、直ちに配付の手伝いをしてくれる人を探してほしいと頼んだ。翌日、姜さんは友人を呼び集め、共に物資を受け取りに行き、被害が最も深刻だと聞いていた地域——震源からわずか十キロ余りの距離にあり、華人が俗に「瓦城」と呼ぶ、マンダレー地方の州都マンダレー

マンダレー大地震

発生日：3月28日

時間：日本時間 15時20分

震源：マンダレー市付近

震源の深さ：10 km

モーメント・マグニチュード (MW)：7.7

ローカル・マグニチュード (ML)：8.2

死者 3,655 人

負傷者 4,824 人

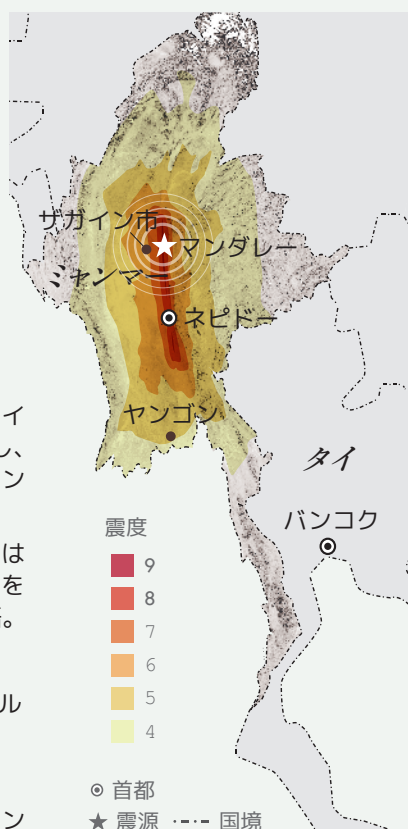
行方不明者 129 人

強い揺れは、人口が密集する中部地域に深刻な被害をもたらした。198,623 人が家を失い、地震発生から 18 日が経過した時点でも、なお 41,733 人が 145 か所の避難所で避難生活を送っていた。

(2025年4月20日現在の統計)

ミャンマー概要

- 1948 年、60 年以上にわたるイギリスの植民地支配から独立し、ビルマ連邦を建国（現在のミャンマー連邦共和国）
- 人口：5,700 万人。主要民族は 8 つで、ビルマ族が最多の 68% を占める。公用語はミャンマー語。
- 宗教：80% が仏教徒
- 一人当たりの GDP：1200 米ドル
面積：台湾の 18.7 倍
(日本の約 1.8 倍)
- 主な自然災害：地震とサイクロン



市に届けた。現地に到着した彼らは、現場を封鎖していた軍と長時間にわたり交渉を続け、ようやく立ち入り許可を得た。

被災現場に足を踏み入れた姜さんは、あまりのショックに言葉を失った。彼は目の前のスカイヴィラ (Sky Villa) を見つめていた。「心が痛みます。言葉になりません。全部、倒れているのです……」。姜さんは一週間後に電話取材に応じた時、もまだ口調は重く、当時の状況を言葉少なに語ることしかできなかった。二週間近く後に同じ場所を訪れたマレーシアのボランティア、王慈惟 (ウオン・ツイ)

ウェイ)さんは目にした光景をこう描写した。「十数階建てのマンション四棟のうち、三棟は粉々で、土の山になっていました。残りの一棟もほとんど崩れていて、四階と五階しか残っていませんでした」。

地震発生後、三日間にわたり、姜さんは毎日、パンやミネラルウォーター、機能的飲料を被災地の災害救助隊員に届けた。彼は「黄金の七十二時間」に、少しでも貢献したいと願った。軍事政権は国際社会に対し、異例の支援要請を行い、多くの国が救助隊を派遣したが、ミャンマーでは重機が不足している上に、被

災地の範囲の広さや猛暑などの要因が重なり、救助活動は難航し、劇的な進展を見せることはなかった。

国際緊急援助体制がスタート

災害直後、被災地が最も必要としていたのは、きれいな飲み水、医療ケア、医薬品、そして避難所であった。国連人道問題調整事務所（OCHA）が運営するリリースウェブの資料によれば、ミャンマー赤十字社（MRCS）と赤新月社国際聯合会は、地震発生後ただちに国内の備蓄物資を配付した。四月中旬現在の統

計によると、世界保健機関（WHO）では百七十トン近くの医薬品、医療器材、テントを提供していた。

姜さんが被災地を訪れ、慈済を代表して最初の物資を届けた頃、各国の慈済ボランティアも緊急災害援助のための物資の調整を開始していた。

ミャンマー慈済事務を担当する慈済基金会宗教処スタッフの梁思諭（リャン・スーユ）さんは、地震発生後ただちに周辺国の慈済事務を担当するスタッフたちと共にプロジェクトチームを立ち上げ、それぞれミャンマー、マレーシア、インドネシア、タイ、中国などの慈済ボラン

ティアに、利用可能な資源を確認してもらった。各国において物資の準備は急ピッチで進んだが、それもミャンマー国内に届いてこそ意味を持つ。その数日間、梁さんと同僚たちが最も心配していたこと——それは、ミャンマー政府が国外からの人道支援物資の受け入れを許可するかどうか、また、国内に届いたとしても、現地の慈済人自らがそれを受け取り、住民に直接配付できるかどうかと

4月11日、ボランティアたちはザガイン市で災害調査を行った。トウエ・トウエ・ルウィンさんは兄と姉を失った悲しみを隠せなかったが、それでも他の被災者に米を寄贈した。（撮影・郭威陽）



いう点であった。

準備中の物資には、福慧ベッド、毛布、蚊帳、テント、保存食などが含まれていた。これらの多くは、屋外で野宿を余儀なくされている被災者を想定し、雨風や地表からの湿気と熱、蚊などを防ぎつつ、安心して休める臨時の避難所を提供するためのものだった。

地震発生後、多くの人が街角や近隣の空き地で寝泊まりしていた。姜さんは、物資を配付していた時、夜間に蚊などに悩まされる問題に気づいたが、ほとんどの人はテントもなく、地面に毛布を一枚だけ敷いて寝ていた。しかしその頃、天

気予報ではサイクロンの接近が予想されていた。予想外だったのは、四月五日夜八時、マンダレーで大雨が降り始めたことであった。姜さんは、「ああ、ひどい雨だ。被災者たちは、どうなっているのだろう……」と、気が気ではなかった。

各国で物資の準備が整っても、それをミャンマーに送ることができるかどうかは、四月三日まで不透明だった。マレーシアのボランティア、張済玄（ジャン・ジーシュエン）さんは、二〇〇八年にミャンマーを襲ったサイクロン・ナルギス以来、長年にわたりミャンマーに寄り添ってきた。震災のニュースが伝えら

れた日、張さんは政府機関に勤める友人から、マレーシア政府がミャンマーに物資を送る計画を立てているとの情報を受け取った。張さんはこの重要な情報をただちにマレーシアの慈済チームに報告し、物資の申請と人員動員の手続きを開始した。

今回の軍用機による輸送は、国と国の交渉次第であり、関係機関はなかなか出発日を確定することができなかった。言い換えれば、各国・地域の慈済人が救援物資を揃えたとしても、もし他の民間組織がミャンマーへの救援物資の輸送を申請したらどうなるのだろうか、た

だ落ち着かない気持ちで待つほかにすべはなかった。

複数ルートで被災地を調査

李金蘭さんは、四月一日にミャンマー南部のヤンゴンに戻った。地震発生から五日目の四月二日、李さんとボランティアの郭宝鈺（グオ・バオユ）さん、温斯郎（ウエン・スーロン）さんの二人はグループを率いて、現地調査のためにマンダレーに入った。通常であれば車で八時間ほどの道のりであったが、地震によつて道路が陥没し、損壊していたため、



マハガンダーヨン僧院では、多くの僧坊が損壊した。ボランティアたちは雨季に備え、夜を徹して、寺院後方の空き地に防水 TENT を設置する計画を立てた。(上・トウエ・トウエ・マウン撮影)

マンダレーの或る体育館では、200 戸以上がトラックの上に蚊帳を張って避難生活を送っていた。ボランティアたちは夜間に被災者を見守り、支援した。(右・郭威陽撮影)



到着までに十三時間を要した。マンドレー空港およびマンドレーへ通じる道路の損壊で、救援活動に必要な人員や物資の輸送時間が大幅に増加したことは間違いなかった。

現地調査チームの主な任務には、マンドレー各地区の被害状況とニーズを全面的に把握することに加え、病院や寺院などの重要拠点を訪問することだった。ミャンマーの寺院は、災害時には宗教施設であるだけでなく、地域の避難所や炊き出し場としての役割も担っている。しかし、今回の地震では多くの寺院が被災しており、寺院の側に対しても支援が求

められていた。證嚴法師は弟子たちに、被害の大きかった地域のみならず、寺院、孤児院、介護施設やシェルターなど、見過ごされがちな街の片隅にも足を運ぶよう、特に念を押した。

国外からの物資はまだ届いていなかったが、ミャンマーの慈済ボランティアは、地震発生から三日以内に、大量の物資を配付するなど、すでに多くのことを行っていた。姜さんは、それまで慈済ボランティアではなかったが、慈済に協力して、被害の深刻な地域や病院に、約四千人分のパン、飲料水、スポーツドリンクなどの慈済の物資を届けた。また、ミャン

マーの慈済ボランティア、林治民（リン・ゾーミン）さんとその家族も、現地で二百五十個の弁当を災害救助の最前線で活動する救助隊員たちに提供した。

林さんと、二〇〇八年のサイクロン以降、慈済に協力しているミャンマーの実業家・林銘慶（リン・ミンチン）さんの二人は、国外からの物資をミャンマー国内に搬入するための重要な役割を担った。

インドネシアの慈済は、当初、インドネシア軍の協力により四月三日に、発電機五台と生活用品千セット以上を送る予定だったが、その後、計画が棚上げとなったことを知らされた。物資の準備

を懸命にしていたボランティアたちは、当然ながら落胆を隠せなかった。何より悲しかったのは、この物資がミャンマーの被災者の助けにならなかったことであつた。

一方その頃、マレーシアの慈済チームはひたすら通知を待ち続けていた。最初は四月二十三日とされていたが、四月十二日に早まり、最終的に四月七日に決まった。通知が届いたのは四月三日で、各地から必要な物資を調達し、輸送し、搭載するまでには、残された時間は三日しかなかった。ボランティアたちにとって、まさに時間との闘いであつた。



4月4日、慈済ヤンゴン連絡所からマンダレーの被災地に届けられた福慧ベッド（左の写真）は、災害救助隊や病院に優先的に提供された。

4月7日午前、マレーシアのボランティア、張済玄さん（右の写真・右から2番目）、李済瑯さん（右の写真・右から1番目）は、マレーシア空軍に同行し、福慧ベッドと毛布をミャンマーに届けた。（左・陳勇華撮影 右・張済玄提供）



第一陣の物資はマレーシアから

二十一人のボランティアが、ケダ州にある慈済人・劉炳坤（リュウ・ビンクン）さんのゴム加工工場に集結した。彼らは福慧ベッドを一台一台高く積み上げ、工業用フィルムで梱包して固定した。工場で働いていた二十人のミャンマー人スタッフも、これらの物資が自国へ運ばれると知り、終業後も進んで運搬を手伝った。

慈済チームは物資をマレーシア空軍基地に届けると共に、赤十字や他の慈善団体とスペースを調整した。四月七日早朝、最終的に軍用機への積載が許可され

完了し、慈済に引き渡され、慈済が直接配付計画を実行した。

林銘慶さんと林治民さんは、許可を得るため、多方面の、様々な機関に問い合わせた。四月五日、慈済は外務大臣から、民間組織の名義でミャンマーに物資を寄贈するための、大筋の同意を得た。空輸する物資は、災害調査の結果をもとに、柔軟に調整された。福慧ベッド、現地で調達した折り畳みベッド、寝袋、蚊帳等のほか、ソーラーライトに、医療用防護用品、保存食と、数はいずれも千単位となった。今回の支援物資は、生活用品が中心であった。「食料品は、できるだけ

たのは、五百二十台の福慧ベッドのうち、八十台のみであった。「幸運にも、六百九十枚の毛布はすべて載せることができました」と張さんは明るく振り返った。目まぐるしく変わる状況にも、ボランティアたちは感謝の心で対応するのを忘れなかった。

今回の物資は、ミャンマーのネピドー軍用空港に到着した。マレーシア支部の郭済縁（グオ・ツアイユエン）執行長の仲立ち、そして、林銘慶さんとミャンマー赤十字社社長との調整を経て、ネピドー赤十字本社副社長の丁町皚（ディン・ディンアイ）医師の協力で通関手続きを

現地で調達することになりました。それに、ボランティアの報告によると、他の多くのNGOも食料品を配付しているとのことでした」と、梁さんが説明した。

毎日悲痛な物語を耳にする

震災当日五十人だった犠牲者数は、四月一日の統計では二千人余りに達し、四月中旬には三千六百人を超えた。「多くの建物がまだ手つかずで、大勢の人が瓦礫の下に埋もれたままです……」と、李さんは花蓮本部とのオンライン通話で語った。



4月4日、福慧ベッドの第一陣が被災地に到着した。マンダレー整形外科病院の仮設入院区では、それ以降、患者たちが地面で生活することはなくなった。この災害支援設備の開発構想は、2010年のパキスタン洪水支援に端を発する。生後間もない赤ちゃんが泥だらけの冷たい地面に寝かされていたことが、上面に通気孔があり、30センチの高さがある「福慧ベッド」を開発するきっかけとなった。福慧ベッドは人の手だけで設置でき、折りたたんで運搬できるうえ、湿気の多い環境にも対応している。(撮影・陳勇華)

建物の下敷きとなっている行方不明者も相当数に上り、実際の死傷者数もいまだ明らかになっていない。こうした状況が、この震災をいっそう悲痛なものとしていた。マンダレーにあるグレート・ウオール・ホテルも地震で倒壊した。マ・ラ・ミン・トゥさんは、幸運にもこのホテルから逃げ出すことができた。母親のイ・ナインさんは、三月三十日にミャンマー北部からマンダレーに駆けつけ、ホテル向かいの寺院に宿泊してホテルを見守り続けていた。マ・ラ・ミン・トゥさんの姉夫婦が、ホテル内に閉じ込められたままだったのである。

四月八日、現地調査チームがマ・ラ・ミン・トゥさんたちと出会った時、最も心を痛めている部分に話が及ぶと、彼女は堪えきれず涙を流した。自分は助かったが、姉と義兄は逃げ出すことができなかった。そのことが、彼女の心に深い痛みを与えていた。母娘は、なおも家族が見つかるという希望を抱いていたのかもしれない。だからこそ、その場を離れようとしなかったのだろう。ボランティアは、この母娘に真心と深い思いやりを込めて見舞金を手渡した。このような物語を、現地調査チームは、ほぼ毎日のように聞きしした。

ボランティアたちは手分けして、病院、寺院、孤児院、シェルターを訪問して、ニーズを聞き取った。保存食や飲料水、洗面用具、サニタリー用品など、現地で調達可能なものは、すぐに購入して届けた。特に、孤児院やシェルターに暮らす少女たちや、寺院の沙弥尼（尼僧見習い）にとっては、このような日用品の存在が大きな安心につながった。

また、福慧ベッドは、被災者、患者、そして多忙を極める医療従事者のいずれにとっても、重要な役割を果たした。地震発生後、多くの人々は屋外にむしろを敷いて過ごしていたが、四十度近くに達

する暑さの中、地面からの熱気で、ゆっくり休むのは難しかった。地面から高さがあり、通気性にも優れた福慧ベッドなら、横になっても座っても快適であり、真の意味で心身を休めることができた。間近に迫る雨季に備え、ボランティアたちは「仕事を与えて支援に代える」方式で、雇った住民に雨避けの設置作業を手伝ってもらった。テント生地や竹竿、むしろなどの資材は慈済が提供した。村人のコー・アウン・クワレさんは、震災で妻が頭と手に怪我を負ったという。被災者雇用で三万チャットを受け取った彼は、「これで妻を病院に連れて行ける」



概算で3千棟余りの宗教建築物が、地震により被害を受けた。寺院は信仰の拠り所であるだけでなく、地域における慈善活動の中心でもあり、震災後には身寄りのない人々を受け入れていた。マハガンダーヨン僧院では、僧侶たちが屋外で野宿していた。ボランティアは資材を調達し、仕事を与えて支援に代える方式で、住民に仮設宿舍と遮水シートの雨避けを設置してもらった。(撮影・郭威陽)

と話した。

被災地に入った最初の週、ボランティアたちは集中的に二十もの村を訪問し、住民のけがの状況やニーズを調査し、家族を失った被災者がいれば、見舞金を手渡した。そして、二週目の四月十三日から十八日にかけて、これら調査を終えた村々で、主に米や油、お見舞金などを配付した。

震源に極めて近いタダーウー郡では、約二千戸の家屋が被害を受けた。ボランティアが災害調査と名簿作成のために訪れた時、ほとんど全ての家で住民たちが瓦礫を片付けていた。四月十四日には支

援物資の配付を行った。住宅が全壊した世帯や、重傷者がいる家、配偶者を失った人がある家に対して、米、食用油、緊急支援金を配付した。住民たちは、困難がたちどころに雲散霧消したかのような笑顔を見せた。

長い仏教の歴史を誇るタダーウー郡には、古い遺跡が数多く存在している。ボ

アイエイクモン寺院が設立したアイエイクモン孤児院 (Aye Yeik Mon Orphanage) では、宿舍の損傷が激しく、1000人の孤児のうち半数が空き地で野宿していた。幸いにも院内には食料の備蓄があった。ボランティアたちはパンを提供し、状況を調査したうえで雨避けを設置した。(撮影・郭威陽)



ランティアの郭さんは、災害調査に訪れた際に沿道の寺院がことごとく倒壊しているのを目の当たりにし、深い悲しみを覚えた。地震がこの地の歴史文化を奪い去ってしまったかのように思えた。

古い寺院は、文化と宗教の象徴であると同時に、観光資源でもあり、地域の人々にとって重要な収入源であった。震災後の復興には資源が必要だが、人々の暮らしは地震によって打撃をうけていた。

マレーシアのボランティア・王さんは、十年余りの間、ミャンマーで大規模な自然災害が発生するたびに、現地で災害援助に駆けつけた。長年ミャン

支援物資備蓄庫によって手配された第一便のチャーター機で物資を送り、四月中旬、マンダレーに到着した。また、同時に第二便も出発した。世界二十以上の国と地域にいる慈済ボランティアたちも、同時に募金活動を開始し、これを支えた。

四月十八日、現地調査チームは緊急援助物資の配付を終え、ボランティアたちは次々とヤンゴンへ戻った。現地の状況も、ある程度把握できた。次なる課題は今後の中長期支援の計画を立てることだが、その行方には不安が残った。ミャンマーは、長年にわたり内戦

マーの人々と接してきた彼は、彼らが非常に善良であると感じていた。「彼らには欲がありません。見舞金を受け取ると、いつもこう言うのです。『すみません。これまで生活にはそれほど困っていませんでした。できれば、ご支援をいただかずに済めばよかったのですが……』。王さんは、「このような善良な人々が、よりによってこれほど多くの苦難に見舞われるとは……」と嘆息した。

配付と同時に、緊急援助物資の輸送にも希望の光が差し込んだ。慈済マレーシア・セラングール支部は、国連人道

状態にある。今回は被害の深刻さを受け、軍事政権と抵抗武装勢力が停戦協定を結んだが、その期間は四月二日から四月二十二日までと限定的であった。

停戦協定が終了した後、慈善団体が地域復興に関与できるかどうかは、まだ誰にも分からなかった。まして、歴史遺産の修復作業に関与できる見通しはまったく立たなかった。慈済にできるのは、この目の前にある貴重な平和の時間を無駄にせず、痛みと悲しみを嫌というほど味わった人々に、支援を届けることだけであった。

（慈済月刊七〇二期より）

一瞬の思い 五十銭の善意



整理・編集部 訳・惟明

慈済はもうすぐ 60年

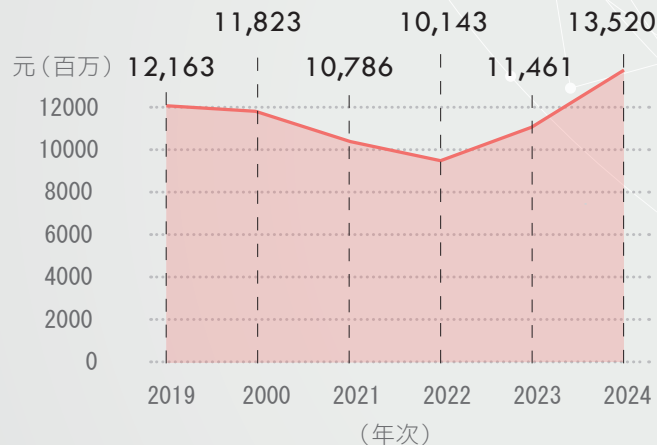
「慈済は約六十年前に始まり、人々に『毎日五十銭の貯金』を呼びかけました。この行動により、毎日『人を救う』という思いを心に刻み、善念を育んできました。慈済はそこから愛の心を拡げてきました。五十銭はわずかで、取るに足りない金額ですが、この精神がなければ、現在の慈済志業は存在していません」——證嚴法師

「仏教克难慈済功德会」は一九六六年旧暦三月二十四日に設立され、今年の四月二十一日に創立六十年目を迎えた。これまで、無償の奉仕と誠実な真心から一念を以て、少しずつ四大志業と八大法印を成し遂げてきた。

ボランティアの無私の貢献

- 2024 年におけるボランティアの無償の貢献価値は **135 億円** (約 601 億円)。

【数値の根拠】昨年度に実施した社会的救済、災害支援、就学奨励金、児童福祉、高齢者福祉、地域福祉、ボランティア奉仕、教育志業の8分野に投入されたボランティアの延べ人数に対し、基本給（時給×勤務時間4時間で計算）に昼食費用を加算して計算されたものである。一人一日一回の任務とし、国内外の交通費、宿泊費、ボランティアの自己負担による贈答品等は含まれていない。



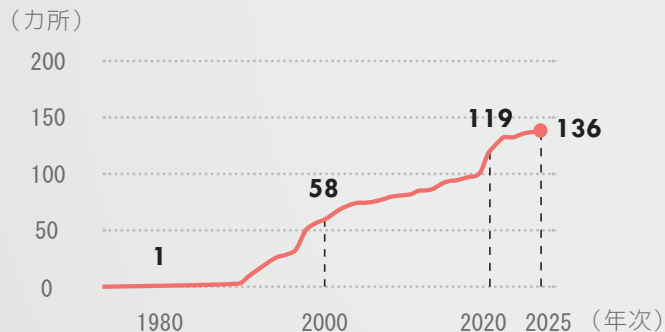
慈済志業は 社会のニーズに即して発展



慈済のあらゆる志業は慈善を基盤として発展した。清浄無垢な愛のエネルギーは、営利を目的とせず、世界に善を施すためのものである。慈善志業の国際化、医療の普遍化、教育の完全化、人文の浸透の四つを柱としている。

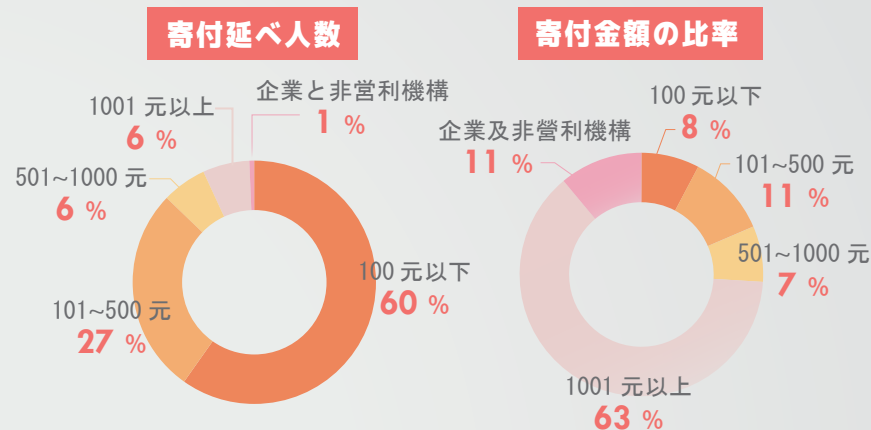
世界の慈済ボランティア

- 慈済ボランティアは、**68** の国と地域に駐留し、これまでの慈善支援は **136** の国と地域に及ぶ。(2025 年 4 月末までの統計)

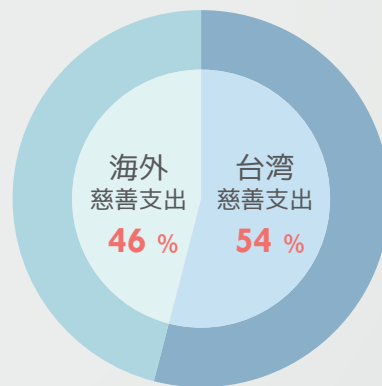


寄付延べ人数、金額比率、 国内外の支出比率

- 2023 年は 1,000 元 (約 4700 円) 以下の個人寄付が寄付総額の **93%** を占めた。



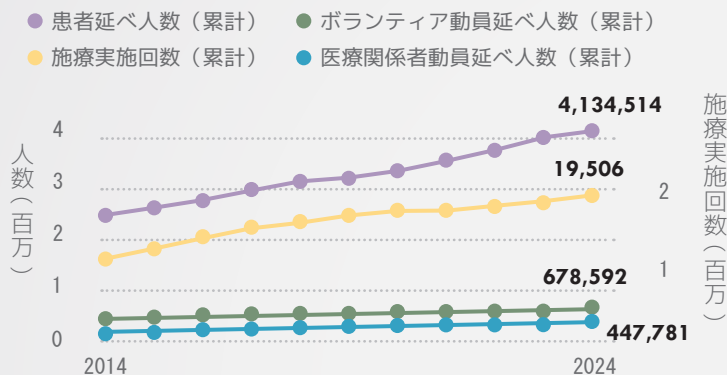
台湾内と海外への 慈善志業支出の割合



本部の 2023 年財務報告は、安侯建業連合会計事務所に監査を委託し、同事務所より 2024 年 5 月 23 日に「保留意見無し」の監査報告書が提出された。

国際医療志業と慈済人医会による 施療の累計

- 国際慈済人医会（TIMA）メンバーは、**28**の国と地域から参加している。医療関係者（医師・看護師・薬剤師・技師等）は**9,504**人、ボランティアは**5,645**人に上る。
（2024年末までの統計）



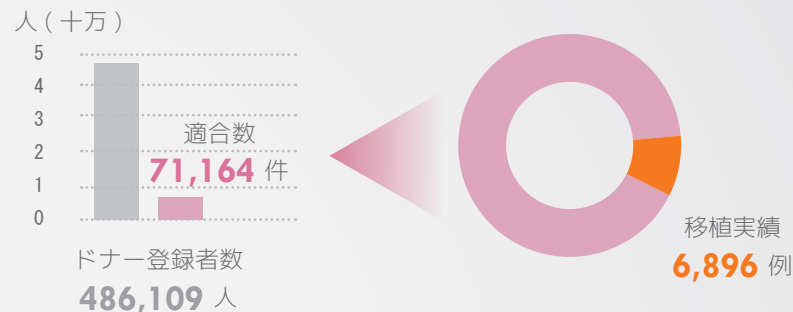
環境保全志業拠点

- 慈済は世界**19**の国と地域に**575**の環境保全センターと**12,433**の地域リサイクル拠点を設置し、**113,083**人のリサイクルボランティアが環境保全活動に投入し、行動することで地球を護っている。（2024年末までの統計）

（慈済月刊七〇二期より）

骨髄幹細胞センター

- 慈済骨髄幹細胞センターは1993年に設立され、これまでのドナー登録者数は**486,109**人、適合数は**71,164**件、移植実績は**6,896**例、提供先は**31**の国と地域に及ぶ。
（2025年3月末までの統計）



人文志業



- 慈済が世界で運営しているテレビ局2社、インターネットラジオ局1社、出版している紙媒体と電子版が10種類ある。
（2025年現在の統計）



月刊『慈濟』

Tzu Chi Bimonthly

慈済ものがたり



日本・岩手県大船渡市 津波と山林火災の後

文・林玲俐、朱家立、洪秀瑩、吳惠珍、陳靜慧、許麗香
撮影・洪秀瑩（慈善ボランティア） 訳・御山凜

この十四年間で、岩手県大船渡市は二度の災害に見舞われた。
東日本大震災から復興を遂げたものの、今年は山林火災に襲われたのだ。
慈済は再び現地に赴き、見舞金の配付を行った。

―― 〇二五年の春、桜が満開を迎える前に起きた山林火災が、岩手県大船渡市を襲った。空気中に焦土の匂いが漂い、人々の顔には、行き場のない不安が浮かんでいた。災害が影を落とす中、まるで温かい光が静かに降り注いだかのように、慈済ボランティアは再びこの地を訪れた。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災では、津波が東北沿岸の町々を襲い、山に囲まれて海に面した大船渡市も一瞬にして津波に飲み込まれた。そしてここが、東京の慈済ボランティアが被

災地の視察を行う最初の場所となった。

その年には宮城県や岩手県などで、十回にわたって見舞金の配付活動が行われ、慈済は物資の提供だけでなく、被災した地元住民に対して実質的な経済的な支援を行った。中でも大船渡市では、三千三百五十五世帯に対し、総額一億七千万円余りの見舞金を配付した。家や家族を失った人々にとって、その現金は再出発の礎となった。

再建はすでに完了していたが、今年二月下旬の山林火災により、二度目の災害に見舞われた人々は少なくない。

五百五十キロ離れた東京の慈済人は、それを知って再び支援の手を差し伸べることを決め、三月十五日に被災地を視察した。そして、四月五日と六日に、三陸公民館で六十五世帯に見舞金を贈呈した。

心に深く根ざした「絆」

清修士の陳思道（チェン・スーダオ）さんは、十四年前、被災地に赴いた際、至る所で「絆」という文字を目にし、人々が互いに助け合う関係を大切にしようと呼びかけていたことを思い出した。「絆」

には「つながり」や「束縛」という意味もあるが、慈済ボランティアと地元住民の交流を表す場合は、長く続く親切で清らかな友情を意味する。それはまさに、證嚴法師が言う「長い情と大愛」そのものである。

その年は配付活動を終えた後も、ボランティアは現地でお茶会を催し続けた。変わらず奉仕を続けた結果、ついに人々の心に眠る宝を掘り起こし、播かれた希望の種が芽を出し、地元ボランティアへと成長した。今回の山林火災被災者支援チームは六十七人で構成され、その

うち二十三人は東北の津波被災地からの参加者だった。

吉田充さんと吉田瞳さん夫婦は、揃って現地での奉仕に参加した。東日本大震災当時、宮城県気仙沼市の市職員だった吉田さんたちは配付活動に協力したことで、



袖野雄さんはボランティアに、必ずこの廃墟の地に再建を果たすと告げた。見舞金の金額は新しい家を作るには到底足りないが、その温かさは新たな生活の第一歩を踏み出す支えとなるのだ。(撮影・朱家立)

慈済との縁を結んだ。瞳さんは、あの災害で多くの大切な友人を失い、慈済が現金の見舞金を配付すると聞いて半信半疑だったが、実際にその様子を目の当たりにした時、再び立ち上がる力を見つけた。

今野芳彦さんは、当時は大船渡市役所

の課長で、慈済の災害支援に協力した。今回の山林火災では、ボランティアに付き添って被災地を視察しただけでなく、二日間にわたって配付活動にも協力した。片山月江さんは、十数年前に慈済の支援があったからこそ今の私がいると言う。当時の恩に報いるために、被災した地元住民のために力を尽くしたいと言った。平山睦子さんは炊き出しに協力してくれた人だが、持っていたすべてを津波で失ってしまったが、慈済のおかげで再び立ち上がることができたことに感謝した。

現地メディア『東海新報』は慈済の支援を今でも鮮明に覚えており、今回は自らボランティアに連絡を取って取材した。記者の佐藤壮さんは、ニュース記事として四件連続で掲載した。「十四年前、避難所で慈済と地元住民の交流の様子を目にしました。当時、被災者たちは支援に対して警戒心を抱き、付帯条件があるのではないかと心配していましたが、慈済は見返りを求めず支援してくれたので、皆喜んでいました」と書かれていた。日本では、被災者に直接現金を渡すというやり方は珍しい。「慈済の皆さんの

温かさと思いやりに触れ、心に沁みました。日本の人々の台湾に対する親しみが深まりました」。

温かい食事とお茶の香りに 和む地元住民の心

見舞金の配付は午前十時からだった。朝早くから、ボランティアたちはお茶を淹れ、お菓子を用意した。公民館の二階にある厨房には、スーパード買った新鮮な食材を使い、温かい食事を調理するボランティアたちの姿があった。慈済

日本支部執行長の許麗香（シュー・リーシャン）さんは、「被災された方々に、温かい昼食とお茶菓子を召し上がっていただきかったです。これは私たちの誠意です」と優しく述べた。

初日に提供した温かい「中華丼」が、険しい表情を浮かべていた被災者の袖野さんの心をほぐし、「とても美味しいです！」と笑顔を見せた。二日目には麻婆豆腐を提供したが、温かくてピリ辛な味わいが、肌寒い季節にぴったりだった。前日に見舞金を受け取った地元住民が、仮設住宅の近隣住民を誘って食事に訪

大船渡市山林火災

- 2月26日に発生。乾燥した気候と強風により、市の面積の約9%にあたる2,900ヘクタールが焼失した。3月初めになって、降り続いた雨と雪により、ようやく鎮火した。
- 約200棟の建物が被災し、50戸以上が全焼した。
- 赤崎町や三陸町などで4,300人以上が緊急避難した。



れた。二つ目の釜のご飯も瞬く間になくなった。

赤崎町外口地区に住む四十五歳の袖野雄さんは、十四年間で二度被災した。津波でマンションを失い、七年前に再建されたが、今回の火災で焼失した。大和民族らしく感情を表に出さず、見舞金を受け取りに来た朝も、悲しんでいるようには見えなかった。彼は、出されたお茶とお菓子を味わい、美味しいと答え、今度は母と妻、四人の子どもたちを連れて慈済が準備してくれる昼食を食べにくると言った。

火災が発生する前、子どもたちが成長

するにつれ、それぞれの部屋を持てるように、家の横に増築した。しかし、避難指示が解除されて帰宅したら、約百坪の家は廃墟と化してしまっていた。その美しかった家は、海を見下ろす山の高台に位置していたのは、津波を避けるためだったが、まさか山火事で失うとは思ってもいなかった。

敷地内に畑を持つ袖野さんはボランティアの林真子（リン・ジンジー）さんに、この見舞金で農機具小屋を建てるつもりだと言った。慈済の温もりは、彼の新しい生活の第一歩に寄り添っていくだろう。「家が建ったら、必ず写真を送り

ます」と彼の母親は、ボランティアに安心してほしいと言った。

山下さんもまた、二度被災した人だ。津波の後、同じ場所に再建した家が今回の火災に遭ったが、「これだけ苦勞に出会ったのだから、もう乗り越えられないことなんてないです」と明るく述べた。ボランティアの井田音心さんに、「すべてがゼロからのスタートで、生活は、まず箸一膳を買うことから始まります。お見舞金を受け取ったら、まず冷蔵庫を買いに行きます」と言った。

縁とは不思議なもので、毛布を受け取った時、袋に添えられていた静思語

に「人生では様々な困難に遭遇しますが、心して向き合えば、どんな困難も小さなものに見えてきます」と書かれてあった。山下さんは「まさに私の人生にぴったりの言葉です。この静思語をバッグにしまい、肌身離さず持ち歩くことにします。きっと私の力になるでしょう」と言った。

ボランティアチームの革新的なリレー

政府は、今回の大規模な山林火災を「局地激甚災害」に指定し、被災者に対して再建補助と新たな植樹支援を提供し

た。慈済の支援物資配付の前日もなお、百九十人余りが避難生活を送っていた。罹災証明書と身分証明書を持参した住民が配付会場に到着し、世帯人数に応じて十万〜二十万円の見舞金を受け取り、全員にエコ毛布が一枚ずつ配られた。さらに高齢者と障害者は、防寒用のショールを受け取った。

慈済日本支部の災害支援の主力は、以前から「スーパードーマンのような」女性ボランティアたちであるが、今年には特に若者、中堅、シニア世代のボランティアがチームを組んだ。若者は事務面での企画に長け、ベテラン委員は奉仕の経験

とこれまでの学びを活かしてお互いに補い合い、敬意をもって協力しあった。早稲田大学に通う慈青の李浩溶（リー・ハオロン）さんは、離れた場所にいる人々も、現在の呼び出し番号が分かるように、電子呼出システムを設計し、配付の流れを一層スムーズにした。

ボランティアたちは、過去の災害支援経験をもとに綿密に計画し、事前の訓練も行い、あらゆる点で地元住民のために考えた。この「感謝・尊重・愛」の精神が、これからも大船渡市の住民に温もりを届け、希望に満ちた明日を迎える力となる。

（慈済月刊七〇二期より）

菩薩の愛は限りなく

この世に情と愛はなくてはならないものであり、

菩薩は人も物も大切にし、あらゆる生命を愛護します。

愛とは独占することではなく、奉仕しても見返りを求めません。

この寛大なる限りない愛は、あまねく世を覆うことができます。

一一 千五百年余り前、仏陀は様々な方法で迷える衆生を目覚めさせるために、この世に現れ、人には元より無量の大愛と清らかな本性が備わっ

ているので、誰もが悟りに至れると言いました。毎年、灌仏会において慈済は、仏陀の生誕と母の日、世界慈済デーの三節一体を祝福します。各地の慈済

人は、心を一つにしてそれぞれ灌仏会を催し、仏の恩、親の恩、衆生の恩に感謝します。その時の心は、希望と睦まじさと喜びに満ち溢れています。

灌仏会当日、私は花蓮で、日差しが強くなるのも、大雨になるのも心配でした。なぜなら、これだけ多くの人々と四大志業の幹部の皆さん、そして教育志業の先生や生徒の皆さんが静思堂前の広場に集まるからです。私は上の階から、皆が区域ごとにきれいに整列し、人文字を形作っているのを見て、大変感動しました。午後には台北の中

正記念堂で行われましたが、私は同じように心配でした。なぜなら大雨だったからです。それでも五百人以上の法師の皆さんが整然と僧服姿でおごそかに入場し、人々を率いて敬虔な気持ちで啓発していく姿に、言葉で言い尽くせないほど感動しました。どのようにして恩返ししたらよいかわかりません。

灌仏会では、参加した人がそれぞれ自分の位置に立って真心と善の念を胸に抱いていたので、和の気が高まっていました。人々が正しい道を歩いている「人間（じんかん）」は、とても美し

いものです。一分一秒、時時刻刻、灌仏会の時と同様に敬虔な心で、お互いに祝福しあい、良い話をして共に良いことをする、これこそが、仏陀が生を受けてから教え導いてこられた、衆生の歩くべき菩薩道なのです。

慈済は間もなく六十年目を迎えます。その一步一步は苦難の連続でしたが、心願が僅かでも揺らぐことはありませんでした。出だしは非常に大変でしたが、それでも私は、初心を貫いてきた自分に感謝しております。今、慈済はすでに国際的になり、私も毎日世界

中を見渡し、天下の出来事に関心を寄せています。

今この時代は、災難が絶えず発生し、地、水、風、火の四つの要素が不調をきたし、天と地の威力の大きさを感じます。しかし、人の欲望はそれ以上に大きく、持っている全ての物に酔いしれていますが、いざ役目を果たなければならぬ時になると、僅かな責任の重さも大きく感じ、何か少しでも思い通りにならなくなると、まるで歩きながら物に当たって痛みを感じた時のように、萎縮してしまうのです。

慈済は、絶えずこの世で志業を広く進めなくてはなりません。なぜなら慈済人の發揮する慈悲心こそが、不安定になった世の中に安定の力を注ぐことができるのです。共業（ぐうごう）は、衆生の心によって引き起こされたのですから、常に衆生の心を善に導き、善法を広める縁を大切にする必要があります。良くないことがあれば、警戒して避けることです。この世で必要とされているものを速やかに集めて広めなければなりません。

世を驚かせる災害と衆生は密接に関

係しており、もし警戒を怠ったり、或いは遠い場所で起こったりしているの
で、自分とは関係ないと思ってい
たら、それは危険な考え方です。何かに当たって痛みを覚えた時のように、環境があなたに警告を与えているのです。世界の何処かで災難が起きれば、私たちは警戒し、同時に多くの人に呼びかけ、皆で協力し合ってこそ、慈善支援を行う力が得られるのです。

世の中に苦難が多い時は、愛のある人が直ちに心から投入する必要がある
ます。世の人々を自分の肉親と同様に

愛し、大切にする人こそが菩薩であり、「覺有情」と呼ばれるのです。覺有情とは、文字通り悟りを開いた情のある人で、この世のすべての生命を愛護する人のことです。世の中には、この情と愛がなくてはならず、愛とは深く、誠実であり、独占欲を持たず、独りよがりでもなく、奉仕しても見返りを求めません。天地のように広い心に溢れるこの愛は、限りがなく、世界中を覆うことができるのです。この情と愛があれば、人生は満たされ、感謝の気持ちに溢れるのです。

仏陀は大悟徹底の大いなる聖者であ

手の心と通じ合い、聴いて分かり、役に立つならば、私はまだ役に立っていることで、私に得るものがあり、私たちはお互いの間で法縁を結んだこととなります。

これまでの事を振り返ってみますと、幸いに間違いはしていません。しかし、何もせず無駄に時間を過ごしていたら、今振り返ることは何もなかったでしょう。現代は科学技術が発達していて、法（道理）を聞くのはとても簡単です。スマートフォンがあればいつでも聞けるのです。慈済の任務があれば、何時でも誘い合って出掛けることができます

り、永遠の悟りを開いた人です。その実、私たちにも仏陀と同じように本覚を備えており、喜んで責任を担うだけでいいのです。この世に生まれてきたのは一大因縁であり、こんなにも多くの同心同願の人たちと一緒にいられることは、何よりの幸福です。もし喜んで引き受けたくないのであれば、業の力で来たのであり、自分の思うようにならない人生になります。

この世に生まれて来たからには、胸を張り、私も自分に「分秒を無駄にしない」と言い聞かせています。もし自分の話した一言が相手の役に立ち、相

す。自分に分秒分かつ得るものがあるように行動していれば、振り返った時に、とても充実して成果が実を結んだ貴重なものだと分かるのです。皆さんが心して精進されることを願っています。（慈済月刊七〇三期より）



理想と現実の間で

問

高校三年生になり、大学進学を考えた時、私は教師になりたいと思いました。しかし、少子化が進む現代社会では、現実的な観点から進路を再考すべきでしょうか？

答・台北慈濟教師懇親会のベテラン教師である李美金（リー・メイジン）先生は、幼い頃から教師を志し、夢を叶

えて四十一年以上教職に就いてきました。多くの優秀な人材を育て上げただけでなく、慈濟教師懇親会の模範となるよ

うな存在になりました。

「教師になりたい」と思っても、少子化の影響で教員の需要が減り、就職の道が険しいものになるかもしれません。どうすればよいのでしょうか？

證嚴法師は「信念・意志・勇気の三つを備えれば、世の中に成し遂げられないことはない」と語っています。「天下に難しきことなし、ただ心ある人を恐れよ」という言葉は、つまり、強い意志を持ち、心して努力すれば、どんな困難も乗り越えられ、立派な教師になれるはずだと言っているのです。

目標を定め、情熱を持ち続ける

最近、家の近くの学校で運動をしていた時、鉄棒にぶら下がろうとしている小柄な女の子がいました。彼女は何十回も両手を鉄棒に伸ばし、ジャンプし続けましたが、なかなか届きません。私は「諦めるのでは」と思いましたが、最後には見事に鉄棒をつかみ、ブランコのように体を揺らしていました。

彼女の満面の笑みを見た時、努力が実を結んだ満足感を味わっていたことを知りました。だからこそ、「教師になり

たい」という情熱を持ち続けてください。あなたもこの少女のように、必ず目標を達成できるでしょう。

全ての道は理想に通じる

少子化の流れは避けられません。教職を目指すだけでなく、別の選択肢を考えることも重要です。私の教え子の一人も教師を目指し、長年非常勤講師を続けていましたが、正規採用にはなかなか至りませんでした。そこで、考えた末、公務員試験を受けることを決意し、一年間しっかりと勉強した結果、

見事に合格しました。また、自宅近くの職場に配属されたことで、安定した生活を送りながら家庭も大切にできるようになったのです。

理想を持つことは素晴らしいことですが、「全ての道はローマに通じる」とも言われます。変化の激しい時代の中で柔軟な姿勢を保つことで、荊の道を歩むことはなくなるでしょう

失うこともあれば得ることもある 心の声に耳を傾ける

元世界NO・1のテニスプレイヤー、

ロジャー・フェデラーさんは私がとても尊敬するアスリートです。彼は優雅なプレースタイル、謙虚な態度、冷静な判断力を持ち合わせているため、いつも危

うい状況を脱して、テニスの頂点に立つてきました。

最近、彼はアメリカのダートマス大学の招きに応じて、卒業式で講演しました。彼は自身のキャリアについてこう語りま



した。「私は千五百二十六回のシングルス試合に出場し、約八割の試合に勝ちましたが、自分で取れたポイントは五十四%でした。即ちわ半分をわずかに超える程度のポイントです」。

「人生において最も大切なのは、失ったことを悔やみ続けるのではなく、それに立ち向かって受け入れ、前進することです。努力を続け、状況に慣れ、成長することです」。

人生の道は起伏に富んでおり、時には孤独に歩まねばならないこともあります。従って、強い意志と自律心、そ

して忍耐力を養い、常に心の声に耳を傾け、歩調を調整しながら、自分の選択を信じ続けていけば、困難な時代でも道を切り開いていくことができるのです。

鉄棒に挑戦し続けた少女やフェデラーさんのように、決して困難に屈することなく努力を続けたことで、美しい花のように咲き誇り、甘い果実を手にする事ができたのです。

（慈濟月刊六九九期より）

命の贈り物

◎口述・邱雪萍（台中慈濟病院9C病棟副看護師長）
整理・蔡嘉琪 挿絵・陳九熹 訳・何慧純

張お婆さんの障害物競走

張お婆さんは、股関節骨折手術の三日目からリハビリを始めた。

一歩踏み出すのも容易ではなかったが、

家族の愛が頑張る原動力となり、

私たちに生命のたくましさを見せてくれた。

高齢がさまざまな課題をもたらすかもしれないが、
決して回復の妨げになることはないのだ。

七

十八歳の張お婆さんは、家で掃除していた時に滑って転び、右側の股関節を骨折してしまい、病院に搬送されて手術を受けた後、整形外科の病棟に入院した。手術して一日目、お婆さんはとても落ち込

み、ベッドに座ったまま、何度も医療スタッフに「私は歩けるようになるでしょうか。これから家族に迷惑をかけるのではないかと心配なので」と尋ねた。

おばあさんの場合、人工股関節置換手術は成功したものの、高齢なため骨格の修復力が弱く、高血圧と糖尿病などの持病があるので、術後の回復には長い時間、努力と忍耐が必要である。その後、家族の付き添いと医療スタッフのサポートの下に、驚くべき意志の強さを見せてくれた。

手術後三日目に、私たちはお婆さんに初期のリハビリを指導し始めた。最初、ベッドから起き上がって座るよう試してもらった時、彼女は苦しそうな表情を浮かべ、あらゆる動作が痛みを伴い、眉を寄せていた。

「足がとても痛くてできません。もうこんな歳ですが、ベッドから降りて歩けるようになるでしょうか」と聞いた。私たちは諦めず、彼女のために「足跡を残しながら」という計画を立てた。

第一段階は、介助有りでベッドで起き上がることで深呼吸と足の簡単

な運動。第二段階は、手助けしての立ち上がりと歩行器を使って重心を安定させる練習。第三段階は、少しずつ歩き始め、毎日病室で少しでも多く歩くこと。お婆さんが初めて歩いて病室を出た時、隣の病床の人の家族と介護者が、彼女に拍手を送った。彼女は笑いながら「本当に、私はまだ歩けるのですね」と言った。

リハビリの過程では、家族の付き添いがとても大切だ。彼女の子供たちは毎日病室にお婆さんを訪ね、温かいサツマイモやじっくり煮込んだスープなど、彼女の好きな食べ物を持ってきた。それによって、お婆さんは温かい心遣いを感じただけでなく、精神的な支えにもなったのだ。

ある時、孫娘が彼女に「お祖母ちゃん、早く元気になって、一緒に公園で散歩しようね」と言った。彼女がそれを聞いて「そうだね、約束するよ」と笑いながら言った。その日から彼女はリハビリに一層積極的になり、ベッドを降りるたびに痛みで眉をひそめるが、粘り強くやりぬいた。「家族を心配させないように、早く元気に回復しなきゃ」。



一歩歩くのも容易ではなかったが、張お婆さんは、遂に歩行器を使って歩くことができるようになり、さらには、ゆつくりと手すりにつかまりながら、階段を何段か上り下りできるようになった。彼女の成果は、同室の他の患者たちにも励みになり、多くの人が彼女の進歩を見て、より前向きに治療とリハビリに協力するようになった。

歳を取って骨折すると、回復する見込みが薄いと思い込み、努力を諦めてしまう人もいる。張お婆さんは並外れた勇気と気力で痛みを克服し、樂觀的な態度でもう一度立ち上がった。家族の愛が彼女の最大の原動力となり、人生への復帰という奇跡を成し遂げたのだ。

高齢であることは試練を伴うかもしれないが、決して回復の障害にはならない。整形外科病棟では、そのような事例を数多く見てきている。立ち上がれない状態から再び歩けるようになるまでサポートしていると、私たちは生命のたくましさに頭が下がる思いである。これからも愛と専門スキルで、必要とするあらゆる人を見守っていきたい。(二〇二四年十二月六日、ボランティア朝会での分かち合い)(慈済月刊六九九期より)

四十六歳からの私の捨と得

四十六歳の時、私は職場から退き、フルタイムのボランティアになった。私はお金に十分な余裕があったからこのような決心をしたのではなく、上人に深く啓発されたからである。

「人のために奉仕できることは、最も幸せな人生である」。

この二年間、心の故郷（ふるさと）とブッダの故郷を往来し、苦難にある人の生活が好転するように尽くすことは、実は自分の人生も好転させることになるのだ。

口述・蘇祈逢、インタビュー・楊秀春（高雄慈濟ボランティア）

整理・魏玉縣（台中慈濟ボランティア）

撮影・蕭耀華（月刊誌『慈濟』撮影者）



忙しい事業の合間に、蘇祈逢（スー・チーフオン）さん（後列左）と妻の徐慧儀（シュ・フウェイイー）さん（前列中央）は、前後して慈済委員の認証を授かり、子供たちも両親と共に奉仕について学んでいる。家族のサポートがあるため、蘇さんは将来の心配はしていない。（写真提供・蘇祈逢）

――〇二二年八月、私は初めてシンガポール・マレーシアボランティア

たちとネパールのルンビニに行った。仏陀の出生の地だが、現在そこに住んでいる人々の生活は、二千五百年余り前の仏陀の時代を彷彿させ、仏陀が目にした苦しみ、訪れた私たちの周囲の至る所で見かけられた。

一般の人々は教育水準が高くない、多くの子供は靴を履いておらず、制服も着ていないばかりか、カバンさえ持っていない。一部の教室には机もなく、生徒は地面に座って授業を受けている。私は以

前父が私に話してくれたことを思い出した。マレーシアの四、五十年前の教育も、ルンビニで目にしている普遍的な困難によく似ていた。

私は證嚴法師の、「人生を好転させるためには教育が必要で、社会の未来は教育にあるのです」という言葉に大きな衝撃を受けた。なぜなら、私は教育を重視する家庭で成長したからだ。

一九六八年五月、私はマレーシアのヌグリ・スンビラン州ポート・ディクソンで生まれた。マレーシア人、華人、インド人が共に暮らす小さな町で、私は五人

兄弟の三番目である。このような田舎では、一般の子供が教育を受ける機会はないのだが、私の祖父が母校サンダイン（山打英）中華小学校の創立者の一人だったので、父が教師になると家族の生活が変わり、私たちを大いに励ました。父も私の小学三年生から六年生までの担任だったので、ずっと私に付き添い、導いてくれた。両親は、子供が勉強することを大いに励ましてくれたことは、私に大きな影響を与えた。

この二年間、私はインドのブッタガヤ及びルンビニに長期滞在しながらも、

時々マレーシアに戻って家族と数日間過ごし、花蓮に帰って、法師にブッタの故郷で推進している志業の進捗について報告している。静思精舎に大体七日から十四日ほど滞在した後、またマレーシアに戻り、二、三日過ごしてから再びインド或いはネパールに戻っている。この間、最も取り組んだのが教育であり、私たちもルンビニで学校を建てる準備を始めた。

人生をどのように過ごすべきか

大学生の時、すでに仏法に触れていた

が、最初の頃は「知識」としていただけた。その後、ガールフレンドと別れた時に、「執着」による「愛別離苦」（あいべつりく）に陥ったことで、いわゆる「苦集滅道」（くじゅうめつどう）という言葉を思い出した。私の「苦しみ」の原因は、良くない因縁がたくさん「集った」からで、何らかの「道」を見つけて、それらを「滅す」べきだと思った。事後、その出来事で私がより深く仏法を認識するようになったことに感謝した。

大学卒業後、私は多国籍企業に就職し、二、三年後には管理職になった。その後、

会社から奨学金を受けてMBAを勉強した。私と妻の徐慧儀（シュ・フウェイ）は、一九九五年に結婚し、三人の娘を育てた。その頃、同時に家業、事業、学業を兼ねたことで、心身共に苦労した。生活は安定していたが、人生とはこうやって送り、こうやって頑張るものなのだろうか？とも考えていた。

二〇〇四年、クアラルンプールで慈済ボランティアの劉済雨（リュウ・ジーユウ）さんの講演を聞いて、慈済の取り組みに深く感動し、直ちに会員になって寄付をした。二〇〇六年のある日、一

人の姉姉に「あなたのお子さんを児童精進クラスに参加させてみませんか？」と聞かれた。子供が仏法の薰陶（くんとう）を受けることを願っていた私は、すぐ八歳の長女を授業に連れていった。

以前、私は南伝仏教（上座部仏教）を学んだことがあったが、そこで話されていたのは修禅、座禅、自度だった。その頃、自宅近くにある仏法クラスに参加して、印順導師の『成仏への道』を勉強していた。導師の教えによれば、「自度する以外に済度してこそ、覚行円満（かくぎょうえんまん）となる」と説いていた。

それが私の心を動かし、覚行円満の修行方法を見つけようと思った。

慈済の児童精進クラスでは、證嚴法師の成してきたこと全てに感じ入った。それは、仏法を着実に生活の中に取り入れ、導師の開示と同様、「心を淨めることが第一で、利他することが最も重要」という教えだった。その年は慈済四十周年の年だったので、私は実業家生活キャンプに応募し、台湾に帰って直々に法師にお目にかかると共に、慈済が四十年間取り組んできた慈善、医療、教育、人文の四大志業が「仏法の生活化、菩薩の人間（じんかん）



インドの貧しい村の学校は設備がお粗末で、数十人の子供が、教室いっぱいに入って授業を受けるのをよく見かける。蘇祈達さんは、教育のみが未来を好転させることができると考えている。(撮影・鄧亦純)

化」であることを目の当たりにした。

マレーシアに戻った後、家族や友人と分かち合った。私は心の中で、法師のみが着実に仏法を実践し、仏陀が二千五百年余り前に語った本懷を、私たちの目の前に示現していると実感した。

長女は三人の娘の中で最も早く菜食を始め、また、私が慈済に入る縁を得たのも娘の存在のおかげだった。彼女は私にとって人生における恩人だと言える。私は、協力チームと互愛チームから和気チーム、合心チームへと進み、リーダーまで務めた。二〇一三年には、慈済セランゴール支部副執行長という重大な任

務を授かった。当時弱冠四十歳過ぎだったが、事業から退こうと考え始めた。

事業を退いて慈済に投入する

二〇一一年から一三年まで、私は或る会社の東南アジア支店をマレーシアに立ち上げる手伝いをした。ゼロからの出発だったので、仕事はとても忙しく、よくタイやベトナム、インドネシア、シンガポール、フィリピンなど、多くの国を行き来した。パスポート一冊が二年以内にスタンプでいっぱいになった。努力の甲斐あって、二年も経たないうちに会社の

売り上げが、一千万マレーシア・リンギットほどに達した。ピーク時には、五百人の社員を管理していた。

法師は、「価値のある人生を送るよう」におっしゃったが、私もそれをずっと考えていた。自分の人生の意義はどこにあるのだろうか？ 功能（くのう）を發揮する人生を選びたいと思った。しかし、当時「事業」の面では、すでに機能を發揮し尽くしたと思った。

その数年間、世界では幾つもの大きな災害が起きた。二〇〇四年にはインド洋大津波が起こり、二〇〇八年にはミャンマーをサイクロン・ナルギスが襲い、さ

らに二〇一三年、フィリピンは台風三十号（ハイエン）に見舞われた。被災地へ支援に向かう場合は、少なくとも十日間は休暇を取る必要があったので、その時はまだ投入することができず、とても残念に思った。

以前、一度台湾に戻った時、多くの師兄姉姉と交流し、彼らが時間の喜捨について分かち合うのを聞いた。朝の「法の香りに浸る」開示から始まり、丸一日、夜までボランティア活動のスケジュールでいっぱいなのだ。彼らはどうやって、いとも簡単にこのような生活ができるのだろう、と思った。お金に余裕ができた



時に退職するのではないのか。生活は裕福でなくても、シンプルであれば良いのだ。なるほど、これも人生の選択肢の一つなのだ！

二〇一四年、四十六歳になった時、事業から退くことを決めた。大金ができたからこのような決心をしたのではない。「人生で、もし人に必要とされ、功能（くのう）を発揮して人に奉仕できるのなら、それは最も幸せな人生です」という法師

蘇祈逢さんとネパールのボランティアは中退した学生の家庭を訪問し、困難の解決へ向けてサポートし、勉強できる機会を大切にしよう、子供を励ました。

（撮影・ラージ・クマール）

の言葉に深く啓発されたからである。それよりも前、私は一人でできる、小さな規模で起業する準備をしていた。その業種はとてもフレキシブルで、いつでも海外に行けるので、慈済に投入することを妨げないのだ。

因縁は実に不思議なものである。善行したいと思った時、とても多くの恩人を守られ、願いが成就するのだ。例えば今、私の妹が業務を手伝ってくれているし、収入は多くなくても、航空券を買うぐらいはあり、生活も心配することはない。ブッダが言った、「仏門に入る者は貧しくならず、仏門を出る者は豊かにはなれ

ない」という言葉を法師は教えてくれたが、私はそれが完全に理解できる。

何事も考え過ぎないことだ。考え過ぎると、何もできなくなる。時間を切り捨て、富を捨て、快適な生活を送りたいという欲を捨てることは容易ではないが、「痛み」を感じてこそ「捨てる」のであり、痛くも痒くもなければ、「捨てる」ことにはならない。

教師と生徒の距離を近づける

慈済では、ボランティアとして奉仕しているので、給料はもらっていない。

二〇一六年、「クアラルンプール慈済国際学校」設立の際、セラングール慈済支部の執行長だった慈露（ゾーラー）師姉は体調が思わしくなかったのを見て、私は放っておけなくなり、自分から「私に手伝わしてください」と言った。最初支部に行っていたのは週に二日だったが、

次第に三日、五日となった。さらに台湾の台南と花蓮、インドネシアの慈済小学校も訪れるようになった。その過程で私は多くのことを学び、責務を担うことで成長を強いられるのだ、と分かった。チームみんなで教育人材を探し、学校建設資金の調達や行政の仕組



シンガポールとマレーシアのチームは、慈済の人文教育の経験をインド・ブッタガヤで実践した。シロンガ村の子供は、最初の静思語授業で「笑顔が最も美しい顔」という言葉を学んだ。（撮影・鄧亦綸）

みの立ち上げを行った。そして、セラングール慈済国際学校の建設は二〇一六年に始動し、二〇二〇年一月に正式に開校した。

二〇二二年、新型コロナウイルスの感染が落ち着くと、法師は仏陀の故郷で苦難を強いられている人々の生活を好転させたいと切に願い、より多くのマレーシアとシンガポールのボランティアに参加してほしいと期待を寄せた。私は慈露姉から、法師の悲願と一緒に叶えませんかと聞かれた。その時、国際学校も軌道に乗っていたので、「はい！」と答えた。

マレーシアで行っている静思語教育

の積み重ねから始まるのだ。

子供たちが慈済の贈った制服を着て、教師を見かけたら九十度のお辞儀をして挨拶するのを見ると、秩序正しい印象を受けた。しかし、食事の時に子供たちが手や葉っぱまたはボールペンを使って食べているのを見た。エコ食器類を贈ってからは、食事の作法も変わった。子供たちはとても純真で、教えて正しく導きさえすれば、彼らは成し遂げることができるのだ。

法師の教育理念は、生活の中で最も必要なことであり、異なる国でも実践することができる。二〇二二年三月から、マ

と、国際学校で提供している人文教育をルンビニで応用したところ、短期間で効果が現れた。七カ月の間、私は十人の教育者の台湾訪問に付き添った。そのうちの七人は校長先生だった。彼らは慈済の教育を称賛し、学んだことを教育の中に取り入れる取り組みを始めた。

今、教師たちは校門に立って、登校する生徒を出迎えている。以前は校長先生や教師と言葉を交わすのが怖かったという生徒もいたが、先生たちが変わったのを見て、自分たちから近づくようになった。人には礼を以て接し、教師を尊敬し、その教えを重んじることは、小さなこと

レーシアとシンガポールのボランティアは、リレー式に交代でインド・ブッタガヤに常駐している。私が、ルンビニで人文教育の推進に使っている五分間の動画をシロンガ村公立学校の校長先生と共有したところ、私たちが教室に入って模範を示すのを許可してくれた。

最初に教えた静思語は、「自分を卑下しない。人には無限の可能性があるから」。また「Khusi - Khusi -」（ヒンディー語で幸せ、嬉しいという意味）という音楽で良い雰囲気になると、子供たちは笑顔になり、校長先生とても喜び、私たちが継続して来ることを快く認め



蘇祈逢さんは、ブッタガヤの慈濟ボランティア養成講座で、責任を担うことを学ぶよう、皆を励ました（写真左）。その直後、村に行って、村民のために仕事の機会を探す手伝いをした（写真右）。



てくれた。それは私たちにとって大きな自信となった。その後、慈済手話を使って、良い価値観を学んでもらった。一年余り、ブッタガヤで続けたが、すでに延べ一万五千人の生徒が静思語の授業を受けた。

慈善志業方面では、私たちは社会の最下層が暮らす貧困の村に入り、若者が就職し難い現状を知った。これは若者の教育水準と職業スキルの問題が関係している。たとえ大学で学んでも、普段は自主学習が主で、試験の時だけ学校に戻っている。大学を卒業したとしても、特に人との交流やコミュニケーション及び思考能

力などの面で、足りない部分が多いのだ。如何にして若者を助けたら良いのか。ブッタガヤは仏教聖地の一つで、各国から巡礼に訪れる仏教徒を惹きつける。そこで私たちは、彼らの英語力を高めて、ガイドや飲食業、宿泊業関連の仕事に就けるよう、英語の先生を招聘した。また、パソコンクラスと裁縫クラスも開き、手に職をつけられるよう、精一杯養成している。

二千五百年前に来たことがある

二〇二三年、私たちは初めて靈鷲山の

説法台を訪れた。そこは仏陀が『無量義經』と『法華經』を説法した場所である。二千五百年余り前にも、きっと私たちは仏陀の前に座って聞法していたと信じている。そして今、『無量義經』の精神を体験し、仏陀の故郷で一つ一つ着実に実践していることにとても感動を覚えると共に、それはこのような因縁を大切にするようにと念を押しているのである。

今では毎月、ボランティアがチームごとにシンガポールとマレーシアからインドに赴いており、一年のうち百日以上滞在している人もいる。私とシンガポールの林金燕（リン・ジンイェン）師姉、マ

レーシアの楊文輝（ヤン・ウエンフウェイ）師兄などは、インド政府に三百六十五日就労できるビザを申請した。私たちが心の故郷である静思精舎と仏陀の故郷ブッタガヤを往来し、仏陀の故郷に恩返しをして、苦難にある人々の生活を好転させることは、人生の中でとても価値のある事だと思う。

私が心置きなく行ったり来たりできることを、家族に感謝しなければならない。妻は大学教授で、認証を授かった慈済委員でもある。長女は二十六歳になり、慈済委員の養成講座を受けており、次女はイギリスで薬剤師をしていて、三女はマ

レーシア・プトラ大学の二年生である。子供たちは幼い頃からとても聞き分けが良く、勉強や試験の心配をする必要がなかった。親が良い手本を示せば、子供たちはその姿を見て自然と学ぶのだろう。彼女たちの理解があるからこそ、安心して奉仕ができるのだと思っている。

法師にもとても感謝している。法師の悲願があるから、弟子たちは喜んで奉仕し、やるべきことを担っているのだ。加えて、現地の人は私たちをとっても必要としているのだ。皆が進んで快適な生活を捨て、摂氏四十度以上の気温の中、不意に起きる停電に耐えながら、次々にチー

ブッタガヤは仏陀が悟りを開いた所で、マハーボディ寺院の塔の前で、ポランティアは『無量義経』を唱えて、仏陀の教えを受け継いだ。人生を好転させるのは大変な道のりだが、成し遂げなければならない。

ムがやって来る。

悟りを開きたいのならば、ここに来たほうが早い。苦を見て悲心（ひしん）が啓発され、悲心があることで、智慧が啓発されるからだ。これが法師の教えの素晴らしさだ。私たちが菩薩道を歩み、精進するようにと励ましてくれる。ここで一カ月滞在し、毎日全身全霊で慈済に取り組むのは、自分の故郷で一年間取り組



むことに等しいのかもしれないと、多くの人が冗談めかして言う。

皆が異なる場所から来て、バックグラウンドも取り組み方も同じではないが、物事が円満にいかない時、心を広く、純粹に持つべきで、自分への試練だと思えば、比較的落ち着いて放下でき、一人ひとりが完璧な「菩薩」であれと執着することはなくなるはずだ。私は今でも、ブツガヤで他人を助けるのも、自分の人生を好転させることであり、状況のおかげで修行しているのだと思っている。

慈済に入ったばかりの頃、最初にした

ことは、敬意を持って證嚴法師の『衲履足跡（行脚の軌跡）』を読むことだった。

当時はほとんど全部読んだ。今ブツガヤに来て、法師は大きな方向を示してくれるが、多くのことはチーム自らがやらなければならない。道を敷き、平坦のみならず広くするにはどのようなすれば良いのだろう。本からしか法師の智慧を真に理解できないが、一寸たりとも逸れず、法師を安心させるには、『衲履足跡（行脚の軌跡）』こそが最も良い、師に付き随う道なのだ。

法師の悲願を喜んで一緒に達成させよ

うとする人は多い。様々な事が恐れる必要はないと私たちを導き、ストレスを軽減させている。逆に今の私たちは絶えず用心し、方向を定め、菩薩の種を培って、使命を引き継いでいくようにしなければならない。

これからも、法師が引き続き、苦難を好転させられるよう導いてくださることを切に願い、パズルの最後のピースを埋めて完成させたい。

（慈済月刊六九六期より）

支援を受けている乞食も人助けしたいと言ったので、蘇祈逢さんが彼と指切りをした。

（撮影・葉晋宏）



伝播という力

メディアには、人々の知識を広げるだけでなく、

智慧を開花させる役目もあり、

誠実に善行して模範を示すことで人々を感動させ、悟りへと導くのです。



無力感を抱きつつも諦めない

一二

月二十七日の人文志策会で上人は、大愛テレビを設立したことにより、確実に慈済の四大志業の声を発信し、大愛テレビの伝播の力で大衆に宣伝

することができるようになったと言いました。「人間（じんかん）のために、私たちの理想とは何なのかを伝える力を得たのです。四大志業は共同体であり、横のつながりを深めて、人心の浄化のために力を合わせる必要があります」。

「今の世の中を見ると、やるべきこ

とがたくさんあると感じると同時に、無力感も感じます。しかし、みんなが力をもっと結集させれば、目標を達成できるでしょう。昔の子供たちは、友達をおみこしのように担いで遊んでいました。二人で両手を組み、三人目の子供を持ち上げるのです。私たちは力を合わせ、良い言葉や良い雰囲気を広め、人々が良い行いをし、良い言葉を口にして正しい道を歩むよう促し、社会に良い『歓迎の雰囲気』を生み出すことが大事です。良い人と良い行いが溢れる世界になってこそ、菩薩

の世界ではないでしょうか」。

「全てのテレビ局は人々に知識を広げて豊かにすることができですが、智慧を啓発することは容易ではありません。しかし、大愛テレビは智慧を発揮する大愛によって人心を浄化することが出来ます。今の世の中に聡明な人はたくさんいますが、彼らの欲望は高まる傾向にあるため、もし彼らが仏法を求め、善知識を求めるようになれば、間違はなく人心を浄化できるでしょう。もし貪欲であれば、無限に貪り続け、永遠に欲を求めて、奪い合うことになります。毎日国際ニュー

スを見てみると、非常に心配になり、無力感を感じます。私たちは今、良い因縁を大切にしてそれを善用し、人文志業の持つ伝播という良能を発揮して、仏法を広めることしかできません」。

上人は慈済の創設当時の様子を語りました。信用を築くために新聞の形で半月刊紙を発行し、五元や十元の寄付でも明細をきちんと掲載しました。これが人文志業の最初の形でした。「その時、あらゆる寄付者の名前が掲載されており、名前を掲載したくない人には『匿名氏（匿

名氏）』と書きました。ある時、何人かの『匿名氏（匿名氏）』がいましたが、どの慈済委員が寄付を集めたのかは、全て明確に記録しました」。

「仏教では『信は道の源、功德の母』と言いますが、信じる心こそあらゆる善行が育つ根源なのです」。従って、全ては「信」から始まるのです。慈済人文志業の報道が全ての人々に信頼してもらえるようになれば、その誠実に善行する模範的な姿が人々に感動を与えるのです。

喧騒の中の静けさ

三月二十八日、新泰区の師兄や師姉たちが、林口静思堂の建設状況とコミュニティの運営、静思書軒（ジンスー・ブックカフェ）の計画について報告しました。上人は、清潔で優雅な環境を保つようにと指示しました。人心を浄化するために地域の道場とジンスー・ブックカフェを設立するのですから、街の喧騒の中にあっても、そこに入ると心が落ち着く空間であってほしいのです。

そこで、ブックカフェでの飲食の提供に関して、上人は、煙や油汚れが周囲の環境に影響しないようにすること、静かな空間で話したい人のためにコーヒーやお茶を提供したり、子供たちにも静かで清潔な場所読書ができるようにしたりすることを期待しました。最も重要なのは、その空間から慈済の精神や思想が伝わり、入ってきた人々に、本を読むだけでなく、世界中にある慈済の拠点地図を見てもらい、各国の慈済の足跡や各道場の発展状況を理解できるようにす

ることだと語りました。

「慈済がなぜ静思堂を建設するのか、分かっていない人が多いので、私たちは、慈済道場がその地域でどのように人心を淨化しているのかを、皆に知ってもらうことにしました。例えば、林口静思堂の場合、当地区には幾つかのチームがありまして、それぞれに担当地区の活動について分かち合ってもらいます。どの家庭にも歴史があります。師兄や師姉がどのように発心し、家庭を和やかにしたのかを分かち合うと、それは教

育になります。慈済人の精神理念を示し、特色を出すことが大切です」。

「私たちは静思堂で慈済の情を広め、人間（じんかん）菩薩の貢献を語り継ぐのです。仏陀が教えた菩薩法、慈済人はそれを二千五百年余りの現代に実践していますが、その行いは自分のためではありません。見返りを求めない奉仕をし、さらに互いに感謝し合えば、感謝と喜びの気持ちに満たされていくのです」。

間取りがどのように人文的な雰囲気醸し出すかについて、上人はこう述べ

ました。「人々が一目見て喜びを感じられるようにすることです。人はいつも視覚で『形や色』をとらえていますから、物の配置が美しければ、見る人は近づいてもっと理解したいと思うようになるものです。中に入って感じる優雅で静かな雰囲気や、座って静かに語り合う様子も、人を惹きつけるものです。傍に立っているだけで楽しくなって、やがて椅子を持ってきて座って聞くようになります。この空間にいれば、人々は耳や目から仏法を吸収することができるでしょう。良い言

葉を発し、そこで聞いた慈済の活動を他の人に伝えるようになるでしょう。これが弘法することなのです」。

上人は言いました。「林口静思堂は、街の喧騒の中にありますが、近づくとも梵唄が聞こえ、静けさの中に妙音が響き、また、世界を舞台にした慈済の奉仕活動について展示があり、慈済人がその内容を語り、慈済の茶道、花道、書道講座を学びたい人々を、人間菩薩を、迎え入れる場所です。ですから、心して取り組んでください」。（慈済月刊七〇二期より）

台湾 Taiwan

● 0121 嘉義地震の後、慈済は震源地に近い台南市楠西区と玉井区で緊急支援と住宅の修繕活動を展開した。更に被災者のニーズに応え、台南市政府と協力して楠西地区に「大愛福利パーク」を建設することを決定した。6月21日に着工し、3階建ての建物で、2階と3階には52室のバストイレ付きの部屋と18室の二人用の部屋があり、全部で70室である。1階には地域住民が集えるホールが設けられ、デイケアとレジャー機能を兼ね備えている。

● 「2025年ワールドマスターズゲームズ」が5月17日から30日まで台北市と新北市で開催された。慈済基金会は、ボランティア活動の一環として、488人のボランティアが各会場でシフトを組み、延べ2,000人以上が107の国と地域から来た選手たちをサポートした。

● 慈済骨髓幹細胞センターの楊国梁主任と医療方面の楊尚憲主任は、カナダ・ケベック州で開催された世界骨髓バンク機構(WMDA)の年次総会に出席し、協会の慈済基金会に対する「再認定証書」を受け取った。WMDAは世界中の骨髓バンクを認証する唯一の機関であり、ドナーの安全な提供と患者への移植品質を確保するため、グローバル骨髓バンクの標準化作業を厳しく規定して、4年に1度、厳格な現地審査を行なっている。慈済骨髓データベースは「Full Standards」認証を取得しており、現在、協会が認証する最高ランクの認証である。(5月19日〜22日)

エクアドル Ecuador

● 慈済は2023年から毎年4月から6月にかけて、マンタ、サンタアナ、プエルトビエホ、カノアの4都市で文具セットを配付し、貧困家庭の子供たちを支援している。今年は5月24日から6月3日にかけて9回行われ、延べ1,113人を支援した。

ミャンマー Myanmar

● 3月28日のマンダレー地震後、ボランティアは4月2日から20日まで第1段階の緊急支援活動を行ない、食料、福慧ベッド、エコ毛布、蚊帳、医療用マスクなどの支援物資を提供した。

● 4月27日より、ボランティアは再び被災地に赴き、第2段階の調査と配付を実施した。第1段階の支援に続いて、累計で12の病院に医薬品、医療、N95マスク、医療用手袋を提供した。また、「仕事を与えて支援に代える」方式で仮設住宅30カ所を建設し、1,822人の僧侶と村人に一時的な住居を提供した。5月25日まで引き続き、被災者に米、食用油、福慧ベッド、エコ毛布、蚊帳などの物資を配付した。さらに6月11日にはタダーウー郡で米と食用油を266世帯に配付した。

● ミャンマーでは6月に新学期を迎えるため、マレーシアのボランティアは国を跨いで支援を行なった。現地の4つの請負業者と「仕事を与えて支援に代

える」プログラムに参加したボランティアを動員して、5月15日から被災した学校や寺院に仮設の教室と住宅を建設した。1戸あたり約13坪で、土地の面積に応じてサイズを調整した。6月15日までに孔子学校の4つの校区と10の寺院の合計87棟を完成させた。マンダレー市、アマラプラ郡、インワ郡、タダーウー郡、そして首都ネピドーを対象に、合計200棟を建設する予定である。

ハイチ Haiti

● ハイチは情勢が引き続き悪化しており、ギャングの暴力事件、食糧危機、コレラの流行、人道支援不足といった苦境に陥っており、広く住民を苦しめている。慈済ボランティアの張永忠さんは、現地で母の日に、地元ボランティアを率いて朝山礼拝活動と灌仏会を催し、社会の早期の平和を祈ると共に、台湾からの人道支援米を2回配付した。（5月25日）

フリンダ Brazil

● 東部のサンパウロ州は2月に連日の豪雨により洪水と土砂災害が発生した。慈済ボランティアは4月に被災地を調査し、被災者リストの再確認を行った後、5月にイタクア市で262世帯に食糧セットを配付した。24キロの物資には、米、油、豆類、小麦粉、調味料などが入っている。(5月25日)

カンボジア Cambodia

● NPOのカンボジア首相青年ボランティア医師協会(TYDA)は、シンガポール、マレーシア、フィリピン、台湾の慈済人医会と共に、タケオ州プレイカバス郡立紹介病院で、眼科、歯科、外科、内科、中医科の5つの診療科目で施療を行い、延べ3,686人を支援した。5月3日から4日にかけて、カンボジアのボランティアとTYDAの医師が眼科手術前のスクリーニングを支援し、施療当日にフィリピン眼科センターが実施する手術の準備も整えた。

● 慈済は2017年からTYDAと協力して、毎年定期的に大規模な施療活動を行なっている。2018年に「カンボジア医療協力及び緊急支援プロジェクト」に関する覚書を交わし、交流が始まった。(5月30日〜6月1日)

モザンビーク Mozambique

● ソファアラ州クーラ大愛村の住居が完成し、171世帯が、風速約250キロの4級サイクロンにも耐えられる新居に入居した。また、ソーラー発電による、基本的な照明も提供された。建設過程では地元住民も参加し、慈済が建築技術を教え、就業スキルと家庭の収入を向上させた。

● 2019年3月、サイクロン・イダイが中部のソファアラ州を襲い、甚大な被害をもたらしたため、慈済は4つの大愛村の建設を企画した。コロナ禍を経た後、2021年に正式に着工した。今はすでに867棟が完成し、使用されている。2026年4月までに3,000棟以上の完成を予定しており、さらに23の学校の支援建設も行う。(6月11日)

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舍街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770

慈済人文志業センター
112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000

静思人文
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

セランゴール支部 KL

TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang

TEL: 604-2281013

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2025年7月18日発行・343号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済伝播人文志業基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



お茶で健康な自分に乾杯！

慈済のボランティアチームは、インド・ブッダガヤの8つの村で「お酒の代わりにお茶」活動を展開した。ティーバッグを贈り、住民に飲酒の習慣を変え、アルコール依存から抜け出して健康を取り戻すよう励ました。

（撮影・王忠義）

慈済の「お酒の代わりにお茶」健康促進プロジェクトはすでに15年の歩みがあるが、海外の慈済人は今、仏陀の故郷でも、インド版「お酒の代わりにお茶」活動を進めている。



慈済日本サイト



慈済ものがたり